

その研究の深さは勿論、逸早くこの點に思を潜めた彼の學風に對して敬意を表すべきである。殊に一九二六年リプト全集編纂の一員としてその完成に努力した學問的勞作に對してこゝに記憶を新にする必要がある。これらの長い間の努力の結晶が即ち本書である。その餘りに豊富な資料と叙述形式の稍散漫なために、全體として必ずしもリストの持つ力強い印象を讀者に傳へるのに成功したとは言へないにしても、本書は經濟學者ばかりでなく歴史家にとつても教へるところが大であらうと信ずる。

### ナチの計理問題

M. R. Lehmann: Planvolle Rechnen in Betrieb und Gruppe. Ein Beitrag zur Wertschöpfungs- und Wirtschaftlichkeits-Rechnung. Berlin 1937. 68 S.

阿久津桂一

レーマン教授はニュルンベルク——ナチ黨大會の開催地——の經營學者として人の知るところ、表記の小論文は統制經濟の強化されつゝある現下の獨逸に於て、經營

の會計制度のもつ新たな任務及び分野を具體的に示さんとする點で注目し値するものと思はれる。

改めて言ふ迄もなく、從來の自由經濟に於ては、私經濟的利益を追求する企業家の合理的判斷に基く活動によつて自然的な經濟調和が齎らされると云ふ思想が支配し、従つて企業の會計制度は營利性を度外視しては考へられなかつた。然るに今日の獨逸の經濟秩序に於て最高目標と仰がれるものは、ナチ黨綱領中に現れてゐる「公益は私益に先立つ」の原則に外ならず、國家が進んで經濟生活の指導干渉を行ふのであるから、此の要求に應じて舊來の會計制度が其の重點を移して新たな領域を開拓すべきは言を俟たない。最早や經營經濟的觀點のみに止まつて會計制度を論議することは許されない。國家・國民と云ふ全體にとつて有意義な價值を計算し、其の結果を判斷することがナチ的計理論の重要な課題となるのであつて、レーマン教授は之を價值產出計算(Wertschöpfungsrechnung)と經濟性計算(Wirtschaftlichkeitsrechnung)の問題として論究する。

衆知の如く、レーマン教授は經營經濟をその活動分野に従ひ、財務單位としての「企業」と生産單位としての「經營」とに分つ。企業の本質は利益の追求であり、収益性は企業の經濟性の表現と考へられる。併し、ナチの經濟社會にあつては最少収益性への努力が要求され、營利思想が背後に押しやられるから、企業よりも主として經營に關して重要な計算問題が発生する。先づ生産單位としての經營のもつ固有の任務は國家・國民の需要充足に直接參與することに求められるからして、經營の計算對象となるものは、國民經濟上特に重要な價值、即ち經營によつて生産された國民經濟的給付でなければならぬ。之を「價值産出」と名付ける。此の價值産出は具體的には所得の形式によつて把握され、之を財貨所得として見れば總収益と前給付(原料費・外部奉仕費・償却費)との差であり、また貨幣所得として見ればそれは勞働收益(勞銀・給料)・公共收益(租稅・公課)・資本收益より構成されるものと言得る。而て價值産出は本來經營に投下された生産諸力(勞働・資本)運營によつて得られる

成果に外ならないから、經營の價值産出と投下された生産諸力との關係からして經濟性の大きさ(勞働效率性と資本效率性、Arbeits- u. Kapitalertragsfähigkeit)が算出される。斯く價值産出計算は國民經濟的給付を算定し、云はゞ損益計算の生産經濟的側面(Erzeugungs-Erfolgsrechnung)を示すと同時に、現實の經濟性の大きさを決定し以て一定の標準との比較を可能ならしむべき任務を有するのである。

斯くして經營の生産活動は個別的な經濟性表現として計數的に把握されるから、更に此の結果から一定の關聯(Isol. Wirtschaftlichkeit)を求め、之を特定の標準(Sol. Wirtschaftlichkeit)と比較することにより經營に於ける經濟性實現の程度が判明する。之が「經濟性計算」であつて、其の中核を形成するものは、廣い意味の經營比較(Betriebsvergleich)である。從來説かれた經營比較は専ら經營内部の事象に限られるが、獨逸の現状は之のみに満足するを許さない。現に經濟相の訓令(一九三六年)は給付昂昇及び經濟性高揚の目的から、經營の上に立つ營

利經濟統制團體をして經濟部門別に周到なる經營比較を行ふべきことを命じてゐる。従つて、個別經營の經濟性を判斷する標準は經營内部に求むるを得ず、經營比較は超經營的比較計算として國民經濟的乃至經濟政策的な意義を帯び來るのである。斯くの如く經營比較の内容の變化に伴ひ、從來、其の主要な地位を占めてゐた原價比較 (Selbstkostenvergleich) は右の目的に適合し得なくなる。同時に、反面には經營の生産諸力の効率性比較 (objektivvergleich) が特別な優位を勝ち得るに到る。

斯様にレーマン教授の立場からは、ナチの會計制度に於ては國民經濟的觀點が特に重視され、其の思想上の重點が企業から經營に移つたものと解され、「國民のための經濟、經濟のための資本」と述べたヒトラーの言葉が其儘會計問題にも反映せしめられる結果となるのである。併し乍ら、假令徹底したナチ的經濟觀の下に會計制度を考察するとしても、計算方法そのものは世界觀的・經濟政策的立場とは全く無關係であると説かれるから、右の結論は單に會計制度に於ける問題の重點の移行を意味す

るに止まるかも知れない。斯く解するならば本論文はレーマン教授の舊著 (e. F. Die Wirtschaftlichkeit des Betriebes und der Unternehmung, Nürnberg 1928; Allgemeine Betriebswirtschaftslehre, Leipzig 1928) の内容をナチ色を以て塗り改めたに過ぎぬとも評せられるであらう。にも拘らず尙此の小著に興味をつなく所以は同教授が會計問題を單に經營經濟的觀點からのみならず更に綜合經濟的觀點をも採入れて考察し、而も兩者の融合する接觸面を求めんと試みてゐるからである。所謂「統制的會計」は會計の統制的・管理的機能の側面を強調するものゝ如くであるが、之を統制經濟の下に於ける會計問題として考へるならば、國家の統一意思による拘束が經營の會計制度に如何に反映せしめられるかの探究にも及ぶべきであらう。而てレーマン教授の如く、此の問題を國家・國民の側から、云はゞ經營の外に立つて考察すると同時に、尙一面に於ては經營にも即して行かうとする態度を採るならば、外からと内から、上からと下からと云ふ如き會計問題考察の觀點の相違と云ふ點から見

ても、興味ある論議が多分に残されてゐるものと思ふ。唯、茲に紹介した小冊子が實際的内容を多く含む性質上右の點につき徹底した説明は得られないが、或意味では寧ろ書中に近刊を約束された「原價計算論」(Die industrielle Kalkulation, 1. Aufl. Berlin-Wien 1925, 2. Aufl. Stuttgart in Vorbereitung) に期待をかけて然るべきではなからうかと考へられる。

## 中立と安全保障

Neutrality and Collective Security, edited by  
Quincy Wright. 1936.

大平善梧

蘆溝橋の日支軍隊の衝突は、次第に擴大し、上海に戦禍が波及し、いよ／＼全面的争闘となつた。かくて事實上の戦争状態の發生するに従ひ、種々なる國際問題が惹起され、日支を廻る列國の動向が注目されるに到つた。就中、英・米・蘇の態度が問題であるは言ふまでもない。茲に米國の中立政策の基調を知るべく、本書の紹介を致

したいと思ふ。本書は一九三六年十一月發行にかゝるもので、シカゴ大學のノルマン・ウエト・ハリス記念基金の事業の第十二回講演を蒐めたもので、これは同年六月二三日から七月二日にかけて開講されたもので有り、從つて米國の伊太利・エチオピア戦争に對する中立政策に注意は向けてあるが、一九三七年三月三十日に再決定を見た現行米國の中立法には言及はしてない。併し本書の四人の講師ツンメルン、ドッツ、ワレン、デキンソンのそれぞれの講義は、今日のスペイン問題並びに日支事變に對する米國外交の動向を觀察するに尙有效な典籍として擧げることができる。

米國の中立法は、全く米國の内部の需要から起つた國內問題として見るべきである。米國の中立外交論は現在三つの陣營に區別できる。一は傳統派にて、平時戦時特に戦時に於ける海洋の自由を主張するもので、自國の通商の擁護の爲めには武力を以ても交戦國に對抗せむとするものである。二は協力派にて、戦争を惹起した責任國を決定し、この國に對して無形有形の制裁を課し、聯盟